台湾一周＆玉山登山ツアーレポート ③

西岡 健二

4 月 27 日（土）、亜土都ホテルの部屋に朝の光が差し込む。6:30 起床、7:00 朝食。タクシーで花蓮駅へ（180 元［1 台湾元≒3.5 円］は今回のツアーで一番高いタクシー料金だ。それでも 800 円ぐらい）。花蓮駅 9:58 発の台北行き普通列車に乗る。10 時ごろから雨が降る。羅東、宜蘭と過ぎ、12:45 瑞芳駅に着く。瑞芳は著名な観光地・九份の入り口だ。手荷物預かりで荷物を預ける（大 50 元、小 30 元）。駅前の日本式拉麺店で昼食（みそ拉麺 99 元）。駅前からタクシー乗車。乗るなり「♪浪花節だよ人生は」、「夢芝居」、テレサ・テンの歌が流れてきた。九份の町並みが見えたところでタクシーを降りた。雨が降っている。九份の町並みは入り組んだ狭い路地に雑貨店がひしめき合うように並んでいる。映画『悲情城市』（1989 年）の舞台になったことから一躍名が知られ、観光地になった。

狭い急勾配の石段を上り、商店の連なる路地へ。とにかく、人だらけで前に歩くしかない。ひと回りして喫茶店で休憩（ホットコーヒー 180 元、ミニ盃のおみやげ 100 元）。

路地が交差した広場の奥に、小さい映画館があった。ここでは毎日『悲情城市』を上映しているそうだ。（日本に帰国してから『悲情城市』をレンタルビデオ店で探したが、残念ながら置いてある店はなかった。

九份の「悲情城市」の看板（筆者撮影）

忠烈祠の閲兵の交代（筆者撮影）

▼台北の町を楽しむ

タクシーで瑞芳駅に戻り、夕刻の電車で台北に向かった。台北に着いてタクシーで宿舎の「新客来商旅ホテル」へ向かった。チェックインを済ませてから町なかへ。人と車とバイクの多い町だった。繁華街で日本食の店を探した。浪花君が現地の人に声をかけ、得意の中国語で店を聞き出した。ビルの 1 階に「美食広場」（日本食の店が集まったフードエリア）があった。丼物、カレー、麺類などのメニューが豊富にあった。僕はエビフライカレー（150 元）を注文した。日本で食べるものより味は落ちるが、まあ食べられないことはない。

翌朝、4 月 28 日（日）、いよいよ台湾での最終日。ツアーも終わりに近づいた。6:30 起床、ホテル向かいのセブンイレブンで朝食を買った。ホテルを出発してタクシーで MRT 台北駅へ。駅のコインロッカーに荷物を預けようとしたが、

ロッカーの不具合で係員を呼び出し、修復するのに時間を取られてしまった。9:05 発の電車に乗車（２５元のチップ型切符）し、MRT 土林駅で下車。タクシーで故宮博物院に向かう。中国本土と台湾にある故宮博物院だが、台湾には優れモノが多いという話もある。入場チケット（350 元）を買い、２時間の見学時間をとって各自で自由に見て回る。この博物院で有名なのがヒスイで造られた「白菜」（バッタとキリギリスも白菜にとまっている）と「肉片」だが、あいにくこの二つともがこの日はなかった。他に貸し出しているとのこと。広大な展示室でとても回り切れない。日本の武具や仏像の展示室もあった。この日は日曜日とあって博物院は大変な混みようだった。

近くのセブンイレブンで昼食をとり、午後は近くの「忠烈祠（ちゅうれつし）」へ。「忠烈祠」は辛亥革命を始めとする中華民国の建国および革命、中国大陸での日中戦争などで戦没した兵士たちを祀った大きな祠だ。観光客の目当ては、１時間ごとに 20 分間行われる衛兵交代式だ。施設の建物の２カ所に配置された直立不動の衛兵たちが、ロボットのような立ち居振る舞いで交代の儀式をこなす。

さらに、MRT 台北 101 駅に向かい、人気の商業施設「台北 101」を見学。MRT 台北駅に戻って駅のコインロッカーで荷物をとり、MRT 桃園国際空港駅へ。

出国手続きを済ませ、20:40 搭乗し 21:00 離陸（ピーチアビエーション ＭＭ860 便）した。

101 ビル（筆者撮影）

日付が変わった４月 29 日（月）、午前０時５５分、羽田国際空港に着いた。真夜中だけに羽田空港の建物内には人も少ない。ただし、各階の休憩所にある椅子席はほとんど人が座っているか寝そべっていた。始発電車まで構内で仮眠、早朝、厚木と大阪に分かれて解散した。

▼台湾あれこれ

台湾の日常生活での数量の目安は 600g である。例えばコンビニの飲料水は、台湾では 600 ㎖だ。岩本さんが台湾茶を買ったが、１パックは 600ｇだった。この 600 グラムを一斤（いっきん）という。

帰国してから調べてみると、一斤は元来 600ｇであったが、本家中国が１斤＝500ｇに見直した。その時、日本は 600ｇのままであり、台湾は日本統治下であったので、日本の度量衡単位が導入され、従来から使われていた１斤＝600g を継承した。ということらしい。

沖縄諸島の那国島からわずか 100km あまり西に浮かぶ熱帯・亜熱帯性の気候の島・台湾。台湾は九州よりも少し小さい島国でありながら、人口は九州をしのぐ２300 万人。そして、前述のように島の東側には長い屏風のように、標高 3000m を超える山々が 200 座以上もある。その山々の盟主が 3952m の玉山だ。台湾最高峰の玉山は、古くは台湾原住民のツオウ族の言葉でパットンカン（八通関/石英を意味する）、19 世紀半ばには西洋ではモリソン

山と呼ばれていた。日本統治時代には富士山よりも標高が高いことから、新高山と名付けられたことはあまりに有名だ。太平洋戦争勃発のハワイ・真珠湾攻撃の際の暗号電文「ニイタカヤマノボレ」にも使われた。戦後、台湾政府は清の時代に使われた呼び名である玉山に山名を戻して今日に至る。

帰ってから、アルパインツアーの「玉山ツアー」をネットで見た。４月 23 日出発で桃園空港集合、バスで阿里山に向かい１泊。翌日、バスで登山口に行き、玉山をめざすというコースで、24 日に我々と登山道で出会ったというわけだ。東京、名古屋、大阪、福岡の各出発地とも４泊５日、24 万 2000 円の参加費用だった。我々は６泊７日で半額以下の費用ですんだということだ。浪花芳法くんや協力してもらった台湾の皆さんに感謝するのみ。謝謝。

台湾に関わる映画を探してみた。何件かのレンタルビデオ屋さんに行った。見つかったのは『セディック・バレ』『KANO』『国姓爺』の３本。どうしても観たかった『悲情城市』は見つからなかった。そのほかに『国姓爺』『湾生回家』、台湾映画最大のヒット作『海角七号』、『台湾アイデンティティ』『恋恋風塵』などなども。結局、台湾映画は中国や韓国映画ほどレンタル作品になっていないということが分かった。執念深く探していれば、いつかそれらの映画にお目にかかれる日が来るかもしれない。

玉山登山の記念になる玉山がらみの土産物が全くないのが不思議だ。Ｔシャツやパノラマ写真、ファイルなど販売していてくれたらきっと買うのに。そう思うと残念だ。

ガイドについても感じたことを書いておこう。ガイドの小綿羊さんは体は大きくはないが、ガッシリと屈強な体つきで頼もしい。女性達が少しバテ気味だったときに、すかさず彼女達の荷物の一部を取って自分のザックに押し込んで担いでくれた。その足運びは小気味いいテンポだった。気になったのは、先頭を歩くペースだ。ガイドのペースが少し速くて、我ら４人との間が結構離れた状態で終始歩くことになってしまった。後続の歩くペースに気を使う必要があったと思う。後続で何かが起こったときにすぐに声がかけられなくなってしまう。実際、岩本さんの足がつった時に、ガイドとの差があったために浪花くんがとっさにホイッスルを吹いたが、そうしなければガイドは気が付かなかっただろう。その点、浪花君の対応は良かった。また、小休止の時間があまりにも短いのも気になった。「５分休憩」と言いながら、実際にはわずか２～３分で出発していた。こんなこともあった。玉山登頂の朝、ガイドから深夜１時 30 分起床だといわれていたのに、ガイド本人は２時に起きてくる始末だ。山頂からの下山のとき、拝雲小屋からの下りが異常にハイペースだったのもおかしい。0.5 キロを 10 分のペースで下った。本来はどこかで昼食をとるために２食分を買い込んでいたのに、結局、昼食もとらずに、登山口に 12 時 15 分に着いてしまった。こうしたことも事前にパーティーに話をしておくべきだろう。異国の山の異国のガイドのため細かい意思疎通がかけるのは仕方がないが、ガイドとしてのあるべき姿は万国共通のものがあるはずだと思う。

（完）

玉山の一等三角点